

立本紘之著

『転形期芸術運動の道標』

——戦後日本共産党の
源流としての戦前期
プロレタリア文化運動』



評者：村田 裕和

本書は1920～30年代のプロレタリア文化運動を、運動参加者たちの「権威」意識の形成とその構造に着目して読み解いた研究である。目次は以下のとおり。

序章 本書の課題と方法

第1章 プロレタリア文化運動の芽生えと同時期の思想状況

第2章 運動理論の大転換と文化運動組織の再編

第3章 文化運動組織の「分離・結合」とその背景

第4章 文化運動組織の発展と権威構造の形成

第5章 一九三〇年前後の党運動と文化運動

第6章 コップ結成後の文化運動の進展と衰退

終章

本書では日本共産党影響下の文化運動団体（ナップ派）がおもに俎上に載せられている。それらの文化運動団体内部において、共産党の「権威」はいかにして形成され、それは文化運動の展開をどのように押し進め、そしてその結

果何をもたらされたのか。

これらの問いが重要なのは、これまでの研究がプロレタリア文化運動を高度な理論闘争の過程として捉え、そうした理論の当否・正誤を詳細に検討してきた一方で、文化運動団体という特殊な“コミュニティ”を、その内部の人々の行動原理やコミュニケーションの様相といった観点から分析することが十分ではなかったからである。

「権威」とは、「自発的な服従や同意を喚起する能力」（p.1）であると本書では説明されている。だとすれば、その「能力」とは、目には見えないが周囲の特定の物質に作用する磁場エネルギーのごときのものであろう。本書が試みているのは、運動体内部のコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしたこのエネルギーを可視化することであり、また、その相互作用として文化運動の歴史を読み解くことである。

はじめに文化運動団体の変遷を確認しておく、プロレタリア文化運動の統一的な組織は、1925年末に設立された①日本プロレタリア文芸聯盟が最初とされる。これは共同戦線的組織であった。一年後、①から非マルクス主義者が排除され、②日本プロレタリア芸術聯盟に改組された。福本主義者が②の主導権を握ったことで、半年後の1927年6月に大量の脱退者が出て③労農芸術家聯盟（労芸＝文戦派）が結成され、5ヶ月後にこの労芸がさらに分裂して④前衛芸術家同盟が結成される。

さらに1928年の3・15事件直後に、②と④が他の団体・個人を吸収しつつ合流して⑤全日本無産者芸術聯盟（ナップ派）が設立された。以後、③文戦派と⑤ナップ派が対抗しつつマルクス主義文化運動が展開されることとなった。その後、⑤は1931年11月に⑥日本プロレタリア文化聯盟（コップ）へと拡大改組されるが、度重なる弾圧によって33年末から34年にかけて

壊滅した。

本書はこの複雑な過程をたどった文化運動の歴史を実に手際よく、そして明解に叙述している。その点だけでも本書は画期的であり、十分に読み応えのある書物である。支離滅裂にしか見えなかった文化運動史上のさまざまな出来事が、本書によって因果の糸で結ばれて、ひとつながりのストーリーとして提示されているのである。

また本書は、党史的な「神話」からの脱却を訴えているが、それだけでなく研究史上の多くの“定説”にも異議を唱えている。

私（評者）がもっとも驚いたのは、理論的指導者蔵原惟人（1902-1991）と彼が結成を呼びかけた⑥日本プロレタリア文化聯盟に対する従来とは正反対の評価である。

1931年は満洲事変が勃発した年である。戦時体制へと傾斜していく中で、⑤のナップはみずから解体し、他の文化諸団体を糾合して⑥コップが結成された。逆張りともいえるこの拡大再組織化は、党員文化人が組織を指導したこともあいまって、32年春の大弾圧を招く（この時地下に潜ったのが小林多喜二である）。

従来、コップ結成という選択は、まがりなりにも合法面で活動していた芸術家を政治闘争の前面に押し出し、治安維持法の標的にした出来事として否定的に言及されてきた。

しかし著者は、党員文化人に依存した組織運動のあり方を問題含みと評しつつも、「政治的優位性」という方針のもとで党（党員文化人）に牛耳られた結果、運動が危険にさらされたといった見方は否定する。

理由の一つは文化運動の目的から政治的要素を除外することはそもそも不可能であるからであり、もう一つは、党による「拘束」は実際にはほとんどなく、そうした認識は、運動参加者たち自身が「権威」意識を自己醸成させた結

果、戦後の回想などの中でそれが“事実”として固定化されたものと考えられるからだという。

本書の核心をなすこの「権威」意識については、以下のように説明されている。

つまり、文化運動が受けていたとされる「党指導」というのは、文化運動関係者が持っていた党の存在・権威を感じ取る意識を前提に、その権威が運動における様々な局面で、時にはある種恣意的に利用され、運動が動かされたという経験に由来するものである。／そして党の権威で運動が動かされたという経験が概念上の党指導とないまぜになり、戦後の「見える」そして指導力を発揮する共産党が顕在化・固定化した状況において、戦前期の運動に対する回顧的な語りがなされていく。その結果当事者・研究者に影響を与えることで確立されていったのが、日本の文化運動における「党指導」だと考えられるのではないだろうか（p.11）。

文化運動の当事者にとっての「共産党」とは、実体以上に大きく彼らの意識に写し出されたファンタスマゴリー（幻像）であり、それ自体がいわば彼らの文学的な想像力と「語り」の産物だったというのだ。これまで盛んにプロレタリア文学を論じてきた私自身を含む文学研究者は、こうした一種の文学的な想像力や「語り」の効果について十分に注意を払ってきただろうか。

次に文化運動と政治の関係性についてであるが、副題にも示されているとおり、本書はプロレタリア文化運動という日本の近代史における特異な組織運動を、戦後日本共産党の一つの源流として見定めようとする試みでもある。戦前の文化運動から戦後の共産党・宮本顕治（1908-2007）体制への接続が成り立つのは、

戦前の文化運動それ自体がきわめて政治的な営為だったからだ。

この政治性には二つの側面が考えられよう。一つは、文化運動団体が共産党のいわば合法面におけるメディアとして政治的に存在していたということ。もう一つは、文化運動団体の構成員たち自身が共産主義的な統治の論理と倫理を内面化し、政治的人間として存在していたということである。

また、文化とは、常にすでに政治的であり、私たちが政治を忘れたところで政治を遂行する場所だとすれば、1920～30年代の文化運動の参加者たちは、まさにそうした無意識の政治的領域としての文化を可視化し、活性化することをめざしていたといえる。

このように考えるならば、党（党員文化人）によって「政治の優位性」論がもたらされ、文化運動の自主性が失われたとする見方は再検討すべきだとする著者の主張には説得力がある。

こうした組織運動の中で共産党の「権威」を一身に引き受けて活躍したのが蔵原惟人であった。したがって、蔵原惟人というひとりの模範的共産主義者の「権威」が、いかにして生み出され、どのようにその効力が発揮され、そして彼の不在が運動に何をもたらしたのかといった点を詳細に叙述した本書は、本格的な蔵原惟人研究としても価値あるものだ。

従来の「政治の優位性」批判にも、蔵原惟人批判にも与せず、著者はコップ結成について次のように記している。

しかしながら、文化人が自発的に党員とあって、党員による合議体制を作ることで運動組織の強化を図るとともに、組織自体を大衆化する試みを同時並行的にスタートさせたのが、蔵原路線の採択と、党フラクション結成の意味するところである。／そして党と文

化運動の関係は「拘束」というより両者の連結であり、文化運動の事情・手法がわかっている人間が党員となり、党と文化運動を適切な距離になるようにつなぎ、両者の発展・双方からの適切なフィードバックを目指した画期的な試みであると評価するべきであろう。運動の衰退はあくまでその後の情勢変化によるものであり、一九三一年のコップ結成と党員文化人の誕生自体はそこまで大きなマイナスファクターとなるものではなかったと考えるべきなのである（p.202）。

私たちが過去を振り返って、わずか半年後の大弾圧はこのコップ結成によってもたらされたのだと断定することはたやすい。だが、わずか半年後の状況さえ誰にも予測できないということ、私たちはまさに今このコロナ禍の中で認識させられている。

誰もがその情勢の中で最善の選択を探ろうとするが、それが最善の結果をもたらすとは限らない。著者はそれがどのような結果を導いたかを問う前に、どのような情勢の中でなぜそのように判断されたのかをまず思考しようとしている。もちろんそれは、ただ当事者の「意図」を汲むことと同じではない。

コップ結成の前年（1930年）、蔵原惟人は不在であった。そこに、党の壊滅と、それと重なるようにしてナップの出版部局である戦旗社の独立問題が起こった。戦旗社をめぐる、党再建グループとナップとの駆け引きが生じ、混乱の間隙を突くようにスパイMが暗躍する。

党と文化人（文化運動団体の構成員）とのディスコミュニケーション、ナップの硬直状態、問題山積の情勢の中で、「渡りに船」（p.198）の状態となっていたのが「文化人党員による主導」（同前）だった。いくつもの条件が複雑に作用する中で、ソ連から帰国した蔵原はその磁

場を整序し、組織の運動エネルギーを一つの方向へと束ねていったのである。

コップ結成やそれを主導した蔵原惟人らに対するこうした評価は、結論だけを示されてもおそらくすぐには受け入れがたいものであろう。実際、私は著者と同席した研究会や合評会で、蔵原惟人を“評価”することに対する戸惑いまじりの質問を何度か耳にした記憶があるし、私自身もそのように感じなかったかと問われれば否とは言い切れない。

しかし、著者が序章で指摘しているように、これまで、プロレタリア文学の源流へと遡行する研究などは盛んに行われてきた一方で、共産党影響下の時代は「回避」される傾向があり、蔵原惟人を中心とするナップ派の指導者たちに対する冷静な議論はあまりに少なすぎた。

指導者蔵原惟人を生み出したのは、蔵原惟人自身の能力によるところが大きいとはいえ、その「権威」はむしろ感じる側のメンタリティの問題であろう。訪ソや下獄などによる蔵原の不在時にこそ、柔軟な理論運用ができない指導部が直前までの蔵原路線の墨守に走り、その結果運動の硬直が起きたとする本書の指摘は、これまでの研究の盲点を突くきわめて重要な指摘である。本書が問題提起となって、ナップ派の文化運動や蔵原惟人について、あらためて議論が積み重ねられることを期待したい。

なお、誤解のないようにつけ加えるなら、著者は蔵原惟人や党関係者たちの言動を、常に道理にかなうものと評価しているわけではない。

たとえば、蔵原惟人と谷一の論争については、「現実的根拠に乏しい空中戦」(p.94)、「組織同士の泥仕合」(同)と評したり、ナップ結成に道筋をつけることとなった蔵原の論文を、福本主義者に対する「撒き餌」(p.105)と表現したり、あるいは、蔵原は情勢に合わせて理論を「選び取る」スタイルを確立したことで「自

身の権威の延命を可能にした」(p.159)と指摘もしている。

また、蔵原不在・党壊滅時に、合法的に機能していた文化運動団体が党再建の足掛かりとしてターゲットにされる様子は、「タコが生きたまま同族に足をかじられるように」、「寄ってたかって食い物に」(p.204)される状態だったこともある。こうしたきわめて的確で明解な比喻を選ぶ著者は、思いのほか皮肉屋でもあるわけだが、これもまた本書の魅力の一つである。

ところで、本書はプロレタリア文化運動、あるいは共産党の歴史に関心を持つ人たちだけのための書物なのかというと、必ずしもそうではない。見方を変えれば、日本の知識人と翻訳文化をめぐる詳細な事例研究でもある。

マルクス主義は、平民社の堺利彦(1871-1933)らによって“紹介”され、日本の労働運動の発展とともに多くの文献が翻訳されてきた。その後、西洋マルクス主義の文献が福本和夫(1894-1983)によってきわめて“学術的”なスタイルで引用される過程で組織の理念・行動原理にまで高められた。しかもそれは、またたく間に蔵原惟人によってもたらされたロシア由来のマルクス主義文献によって上書きされた。

本書第2章では、1924年に福本和夫が登場し、マルクス・レーニン主義が強力な運動理論として権威化する時期が論じられている。ここでは、いわゆる「福本主義」を支えた二つの要素が注目されているのだが、一つは、福本が発表した論文の学術論文的な体裁が、知識人たちの教養主義的な感性に適合したこと。もう一つは、自己修練を積み重ねる模範的革命家像を提示し、修養主義的な文脈で知識人による大衆啓蒙を動機づけたことである。旧制中学校・高等学校でこうした教養・修養に親しみ、社会の不

正に憤りを覚え、善なるものを追求しようとした人々は、しかし、なにゆえ他律的な規範に身をゆだね、硬直した組織の中で「権威」にすぎるという自縄自縛に陥ったのか。

またなにゆえ、翻訳・紹介された理論を十分に検討せぬまま鵜呑みにし、しかも次々と新しい理論に乗り替えていくのか。西洋の文芸思想を次々と受容してきた文芸家たちの営為ともこれは重なる。

このように考えた時、本書が提起するのは、ただマルクス主義文化運動の消長に関する問題

だけでなく、近代日本における知と権力がどのように構造化されているのか、その構造全体の中で「権威」意識の生成・流通がいかなる役割を果たしてきたのか、また現に果たしつつあるのかといった点にまで及ぶように思われる。

(立本紘之著『転形期芸術運動の道標——戦後日本共産党の源流としての戦前期プロレタリア文化運動』晃洋書房、2020年3月、iv + 340 + 7頁、定価7,800円+税)

(むらた・ひろかず 北海道教育大学旭川校准教授)